

Creative Economies の行方
ASEF (Asia-Europe Foundation): ASIA-EUROPE
Emerging Photographers' Forum 2009 KUALA LUMPUR
の取り組みと課題

中村浩美 (東京都写真美術館 学芸員)

NAKAMURA Hiromi
Curator, Tokyo Metropolitan Museum of Photography

CREATIVE ECONOMIESの行方

ASEF (Asia-Europe Foundation): ASIA-EUROPE Emerging Photographers' Forum 2009 KUALA LUMPURの取り組みと課題

はじめに

本論は、2009年5月10日から18日までの9日間、マレーシアのマレーシア国立美術館 (Balai Seni Lukis Negara, National Art Gallery Malaysia) およびクアラルンプール市内のアネックス・ギャラリー (Annexe Gallery, Central Market) で開催されたアジア・ヨーロッパ相互文化交流フォーラム、“ASIA-EUROPE Emerging Photographers' Forum 2009 KUALA LUMPUR”におけるシンポジウム、講演会、ビューイング (viewing)、そして参加者らによる展覧会等をまとめた報告書である。本フォーラムは、アジア14カ国、ヨーロッパ28カ国が参加する相互文化事業を主な活動目的とする非営利団体ASEF (Asia-Europe Foundation)¹⁾の主催で毎年テーマを変えて実施され、今回は昨今の「100年に一度」と比喻される、アメリカに端を発する世界経済の悪化にともない、“Creative Economies”を研究テーマとし、アジア・ヨーロッパから選抜された23名の参加者 (participant) と8名の進行役・調整役 (facilitator)²⁾によって行われた。こうしたスタイルの写真フォーラムは、2002年よりASEFの新進アーティスト育成事業のひとつとして開催されてきたものだ。毎年20-25名のアーティストたちを参加国からの公募で募って、プロの写真家をはじめ、エディター、研究者、そしてキュレーターといった専門家たちとのディベートやプレゼンテーションを通して、最終的には共通のテーマに基づいた展覧会を開催するのがゴールである。しかしながら、今回の経験から改めて学んだのは、このゴールが可視化された最たるものとするならば、実際には可視化されない、いわば不可視域の会話や作業もまたきわめて重要なプロセスであるということであった。



©伏見行介

〈ブログ〉の光と影

当フォーラムはふたつのステップから成る、実験的な試みが行われた。ひとつめは、参加者および関係者による任意の公開ブログ会談 (the blog interaction and exchanges) で、フォーラム開催の1カ月前からアクセスがオープンになった。そもそも、ブログとは個人が気になった出来事のURLを、自らのコメントを付して紹介した英語のウェブサイトが始まりとされている。その後、さまざまなブログ用のツールが出現し、本格的な拡大を見せたが、現在私たちが呼んでいる〈ブログ〉には、より個人的な体験や日記のような意味合いが強くなった。換言するならば、現代のブログは、もれなく他人に読まれることが前提であり、また他人の眼に晒されることによってこそその価値を増す。こうして普及してきたブログというコミュニケーション・ツールを、来るべきフォーラム本番のための意見交換の場にしようと考えたのである。

その「光」の部分——すなわち、効果はすぐに表れた。オープンして間もなく、関係者からの問題提起がなされ、時差の関係はあったとしても、ほぼ同時に情報がしかるべきところに伝達されたのである。

間髪を入れず、次々と呼応するコメントが寄せられ、そのスピード感
は、まさに高度情報化社会に生きる恩恵を実感させるものであった。
しかし、やがて「影」——つまり、マイナスの部分も表れだした。と
いうのも、アクセスして瞬時に思ったことは、とにかく文章が長いこ
とである。延々と、コンセプトをはじめアイデアやコメントが英語で
続く。正直に言えば、スクロールするのが次第に億劫になるほどだ。
ネイティブ・スピーカーには当然の行為であろう。がしかし、参加者
は私も含めほとんどが非ネイティブ・スピーカーだ。案の定、数日経
つと書き込みは限られた者のみになってしまった。さらに日が経つと、
頻繁にコメントしていた者たちでさえ目に見えて文章量が激減して
いった。結局、この試みが示す教訓とは、新たな情報ツールを過信し
てはいけないということではないか。加えて、参加するかしないかは
任意であるがゆえに、全く参加しない者を〈置いてきぼり〉にしたま
ま進行する、という手法ははたして正しかったのだろうか。

現に、かつて最先端のコミュニケーション・ツールとされてきたブ
ログにも世代交代がおこっているようだ。米国における若年層のブ
ログ人気は低下し、新たなソーシャル・メディア（SNS）への移行が進
んでいるらしい。また、日本でもブログとチャットの「良いところ取り」
のようなシステムを持ちツイッター（twitter）の台頭が著しい。他者
の発言に対して、140文字以内のつぶやきを投稿するという「文章の
短さ」、「お手軽さ」が最大限の魅力といえよう。奇しくも、わずか半
年の間に、ブログというひとつの情報伝達手段を通して、次代のコミュ
ニケーション・ツールのあり方を目の当たりにすることになった。

プレゼンテーションとディスカッション

東南アジアの中心に位置するマレーシアは、マレー半島とボルネオ
島の一部、サバ・サラワク州から成り立ち、マレー系・中国系・イン
ド系、そして多数の部族に分けられる先住民族で構成される多民族国
家として、それぞれの民族が持つ宗教、生活習慣の融合は独特な文化
を生み出している。メイン会場となったマレーシア国立美術館は、
1958年に創立され、現在2,500を超える近・現代アート作品を擁する一
大アートセンターである³⁾。螺旋型の階段によって独立したスペース
を有する複数の展示室は、マレーシア美術を歴史的側面から、あるいは
海外の動向を示す教育普及的側面から、そして若いアーティストたち
の活動・発表の場となるショーケースとして、それぞれが有機的に
機能しているようだ。当フォーラム期間中には、マレーシア国立美術
館と赤十字国際委員会（ICRC: International Committee of the Red
Cross）との共催による写真展“*Our World. Your Move*”（James
Nachtway, Ron Haviv, Franco Pagetti, Christopher Morris, Antonin
Kratochvil）が開催され、老若男女を問わず多くの入場者で賑わって
いた。

ふたつめのステップであるフォーラムは、多民族国家による、多様



©伏見行介



な文化の在り方を提示するひとつのショーケースとして、今回の会場がマレーシアで開催されることの意義と、その成果を期待するという当館館長の歓迎スピーチから始まった。引き続いて、参加者全員によるトークとスクリーニング(screening)による作品紹介のプレゼンテーションへと移った。各自がアドリブで、もしくはあらかじめ準備した原稿をもとに、今回のフォーラムへの参加理由と自らの制作活動との接点または関連性を語る、いわば自己紹介の場とも言えよう。そのスタイルは、持ち時間以内であれば自由自在だが、時に、トークが長過ぎるアーティストには、“Let the work talks”のヤジが容赦なく飛ぶ。スケジュールもなかばを迎える頃には、参加者も要領を得たようで、すっかりリラックスした様子で壇上にあがっていた。私たちには事前に、インターネットのサイト上で参加アーティストらの応募作品を自由に閲覧できるようになっていたのだが、やはりアーティスト本人によるコメントやエピソードを実際に聞いてみると、その印象はかなり違って来る。撮影現場でのリアルな体験が、ストレートに伝わってくるからだろう。口数が多いか少ないか、あるいは弁がたつかたないかにかかわらず、作家自身から発せられる生の声からは、素直な感動や戸惑いなど、実に人間的な感情の〈揺らぎ〉が感じられて大変興味深かった。

なぜ、写真なのか？

この日最後のセッションは、参加者と関係者全員によるオープン・ディスカッションであった。“Creative Economies”という言葉の解釈をめぐって、活発な意見が飛び交う最中、ASEF側からひとつの問いかけが投げかけられた。「なぜ、写真なのか？」という問いは、何も今回だけに限られたものではない。そもそも、彼らが写真フォーラムを創設し、活動を開始したその時から、この問いかけはなされてきたのだ。今回改めて提案されたのは、以下のとおりである。

The Emerging Photographers' Forum wants to emphasize the significance of photography as a medium of communication that reflects the constantly changing society.

How can creative photography impact the perception of shifting economies in the globalised world and in which ways can social cooperation and creativity meet in the space of indeterminate economic capacity? ⁴⁾

当初より、「写真（イメージ）は言語を超える」こと、加えて「写真はいつの世もその時々世相や感情を湛え、映し出す〈時代の鏡〉である」ことを繰り返して訴えてきた筆者にとって、こうした問いかけは歓迎すべきものであった。ましてや、「社会変革のために」、写真でその一助となるとしたら、この会場に集まったすべての参加者にとってどんなに意義深いことだろう。やがて、議論が白熱するなかで、写真に関わる表現の自由について話題が及び、主催者からはこれまでの

前例として、ヴェトナム社会主義共和国で写真展を開催する際には、事前に政治、宗教および性に関する表現の検閲が必要であることが語られた。これに対しては、一様に反発の声があがったが、そのほとんどは先進国のいわゆる西側諸国である。一方、当のヴェトナムをはじめ中国、モンゴル、カンボジア、タイなどの国・地域からの参加者からの反論は一切聞かれなかった。いや、正確に言えば、いまだ表現の自由と検閲をめぐる是非が問われる段階ではないのではないか。日本の現状を質問され、筆者は性をめぐる検閲の事例として、海外で購入した写真集を税関で没収されかかった体験談や、猥褻図画公然陳列の疑いで警視庁により作品の押収、事情徴収後、書類送検され、罰金刑を受けた写真家らの事例とそれに対する疑問を話したが、やはり共感を得られたのは先進国の数人にとどまった。写真というメディアが、言語や国境を越え、文字通りグローバル化していくためには、検閲という不透明なフィルターが立ちただかることがあってはならないはずだ。アナログからデジタルへの変換は、世界の共通言語 (global image) としての写真の可能性をさらに進化させる大きな契機となった。次なるステップとして、それを深化させるために、私たちはさらなる共通の声と眼を養わなければならないと実感した。

ファシリテーターの役割とは？

最初のASEFからの招聘要請文には、見慣れない単語があった。それが、“facilitator”である。日本語では、進行役、促進役、推進役、引き出し役、調整役、介助役、世話人などと訳され、主に会議の進行に欠かせない役割と位置づけられている。これまで、筆者は講演者またはゲスト・キュレーターとして招聘されてきたが、それらの役割とどう違うのか——事前の資料を準備する一方で、この機に「ファシリテーション」について調べてみることにした。諸説をまとめてみると、「組織のパワーを引き出し、優れた問題解決に導く技術」といったところか。主に会議の進行時に求められるが、プロジェクトの推進、組織変革、教育など、幅広い分野で活用できうる技術だという。とりわけ、教育においては参加型学習（ワークショップ）の進行役を指す場合が多く、学習者が持つ知恵や知識、情報などを出し合い、共有する“学びの場”を促進する役割の意味で使われるらしい。

実際、当フォーラムに招集された関係者は、さまざまな国の異なる領域で活動する専門家たちで、各領域・分野に沿って参加者たちの参加意識や能力を高め、最終的にはフォーラムを推進させ、成功へと導く「ファシリテーター」の役割を担っていた。まず気がつくことは、前出のブログと同様に、「発言している人は特定の人ばかり」ということだ。当フォーラムの参加者は、アーティストとファシリテーターをあわせるとアジア・ヨーロッパの21カ国からなる、それぞれが異なる歴史、言語、文化を持つ国際的な集団である。共通テーマである“Creative Economies”についても、ネイティブの言語として容易に

受容できる者と、母国語以外での理解を強いられる者にとっては、おのずと各自の持論の展開も大きく異なってくる。となると、当然のごとく口数が多く、かつ情感たっぷりの饒舌さが目立つのは、英語を母国語とする国からの参加者たちである。ところが、下手に発言すると攻撃の対象になる、という恐れからか、たとえネイティブ・スピーカーであっても積極的な発言にはつながらないことも多々見受けられた。こうした事態に素早く対処するのが、ファシリテーターであった。

ファシリテーターは、話し合いのコンテンツ（内容）に介入することなく、フォーラム自体のプロセス（進行）に介入することを目的としている。たとえば、明らかに発言者の面々が偏った場合には、速やかに他の参加者を指名して発言を促す——時には、補足説明を加えたりもするし、また、参加者同士が対立状態に陥った場合には、あえて話題を変えてみたり、場を和ませるための雰囲気づくりも必要な措置であるといえよう。大切なことは、各自の主張がかみ合わないことに固執することなく、限られた時間やメンバー、その他の条件下においても、極力一定の合意に向かって論点を整理していくという客観的な立場である。もうひとつの重要な点は、終始中立の立場を貫くことだろう。



展覧会の成果と手応え

ファシリテーターたちの役割は、フォーラムの進行促進・管理のみならず、それぞれの活動に応じたレクチャーが実施されたが、筆者は、昨年の当館紀要でも掲載したUCLAでの講演“*SWEET & BITTER: The Intimate Mirror of Contemporary Japanese 'Girl' Photography*”に引き続き、ASEFの要望に応じて“*IN & OUT of Tokyo: Tokyo Seen by Magnum Photographers from 1950s to the Present*”⁵⁾を発表した。その間を縫って、参加アーティストらと直接作品を見ながら講評する、“Portfolio Review”が行われた。実は、筆者がもっとも楽しみにしていたプログラムであったが、時間の関係上もあって、およそ半数のアーティストたちにしか接することができなかったのが悔やまれるところだ。実際、私たちのみならず、彼らも展覧会の作品づくりや、展示のアイデア等でかなり多忙だったに違いない。せっかくのプログラムにもかかわらず、話の内容が間近に迫っている展覧会の作品に終始してしまったのも否めない状況であったのだろう。ともあれ、事前のブログでも、直近のディスカッションでも埋まらなかった距離は、こうした対面の機会を持つことで一瞬にして縮まるものである。短い時間、かつ限られた人数であったとはいえ、ここでの出会いは貴重な経験として強烈な思い出となったことは確かである。

さて、クアラルンプールの観光地として名高く、観光客や地元の若者たちで賑わうセントラル・マーケットは、プロジェクトのゴールとして、当フォーラムの成果を写真展というかたちで発表する恰好のロケーションである。マーケットに隣接し、複合商業ビルの3Fにあるア



©伏見行介



©伏見行介

ネックス・ギャラリーは、アーティスト自らが管理・運営を行うマレーシアの現代美術のセンター的な役割を担っているスペースだ。プリントからキャプション、バイオグラフィーまで、参加者自身がすべての制作を行うため、人やモノの出入りでごった返す中、それまでファシリテーターとして彼らと関わってきた筆者とNathalie Belaycheは、ここではキュレーターとして展覧会を形づくる役割が課せられた。なにせ、23名によるグループ展である。国内外を問わず、アーティストはアーティスト——常に、作品のチョイスと展示点数、そして場所の振り分けにはそれ相応のバトルが展開されるのが恒例だ。とりわけ、展覧会の経験値が低い若手のアーティストは、必ずといっていいほど展示点数を増やしたが。彼らは頑なに「数」が成否のカギを握ると信じているが、実際には観るものを混乱させるばかりだ。そのことを論すまでに、かなりの時間が割かれたが、これは展覧会を構成するうえでもっとも重要なプロセスのひとつである。結局、オープニング前夜は徹夜になった。

冒頭で述べた、「不可視域の会話や作業の重要性」は、この展覧会の準備にかかった一連のプロセスに尽きる。本展の成果とは、全員参加でひとつの展覧会をかたちにしていくこと、そして手応えとは、翌日のオープニング以降、この場を介して観覧者たちと出会うことである。友人でも、知人でも、関係者でもなく、未知の人々と出会うこと。それは、アーティストならではの特権であり、存在意義 (raison d'être) でもある。今回の経験をもとに、参加者それぞれが展覧会のあり方や作品の見せ方を、自分本位ではなく、客観的に考えてくれることを願うのみである。

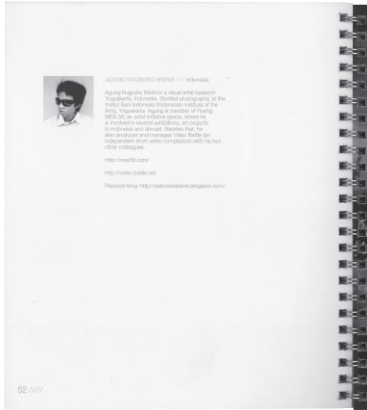
おわりに

最後に、今回のフォーラムに参加し、“Portfolio Review”の機会を得た3名のアーティストたちに依頼したコメントを紹介したい。彼らはいずれも、ドキュメンタリーのスタイルで、それぞれのテーマを表現している若手の新進アーティストたちだ。本論の掲載にあたって、参加者としての率直な感想を求め、それに応じてくれたものだ。コメントは、以下の共通する5項目に沿って寄せられている。

- 1) ASEFの国際交流プログラム／アクティビティを通じて、もっとも有意義であったこと。
- 2) 今回のフォーラムを通じて、共通テーマである“Creative Economies”をいかに理解したか。
- 3) 次回のASEFの国際交流プログラム／アクティビティには何を期待するか。
- 4) 今回のフォーラムを通じて、最大の収穫は何か。
- 5) 将来に向けて、ASEFが再考すべきことは何か。



©伏見行介



Agung Nugroho Widhi (Indonesia) ⁶⁾

About the forum itself, in a way I'm glad to be part of it but I'm also not really happy with the way they organized it. Or how they keep in touch after forum's finished. Same like you, maybe... There are some things which have to be considered (more seriously) by ASEF for their next photographers' forum. First, the selection of the participants. In this case, I think it would be (much) better if ASEF could involve curator or some other photography/art practitioners for the participants selection. I know and heard how ASEF selected the participants during our last briefing. They chose the participants based on the letter of motivation that we sent in our applications, not really based on the portfolio or balance between two of it. I don't think it's enough for this kind of forum, and that's (one of) the importance for ASEF to involve some other persons whom I mentioned for the selection, because ASEF is not an art/ photography institution.

In a way, I felt that there was a "gap" in the context of experience and artistic/aesthetic establishment both from Asia and Europe participants. There are some persons who are already (very) well experienced, or artistically already established and there are some other persons who look like "hobbyist" for me. In the other way, photography background/ practice of each participants has to be thought. For example, not all photographers or the ones who work with photography are photo journalists, or into conceptual/ art photography. For this thing, I assume that ASEF didn't really consider it. I found this difference in that forum and it was very obvious. I heard from two friends of mine, that (most of) the participants background/ photography practice of the forum in Ireland was completely different with the one in KL. Most of the participants in Ireland, were more into conceptual/ art photography (I could see this in Secured Area exhibition) and I had completely different circumstance or situation in KL. Nothing wrong about it actually, and I had no problem with it as well. But I don't think it's good or proper to mix all (those differences) together in an exhibition, forum or project (even under one theme). Of course it would be diverse, but it would or could be "a bit messy" sometimes. Well, I think so... I don't know how to bridge this difference, please tell me your comment on this if you don't mind. Here, I'm part of an artist collective/ non-profit photography institution which is more into visual art scene (I'm just the same with Robert Zhao from Singapore, actually). You can check this link as your reference: <http://mes56.com>

Second thing which has to be "fixed" is the program/ format of the forum. I must admit that the forum was really well organized, but in

a way it was too formal. Most of the time I just became a listener who listened to somebody else's talks and lectures. It made me feel like a student again. The portion for the participants and for the facilitators was not balance at all. It would be much better if ASEF or the local organizer could give some (more) time for the participants to speak for their selves. Put them as speakers, not just listeners. I felt that the presentation session in the 1st day was just a bullshit, it just looked like a formality for me. Presentations of 23 persons in 1,5 hours was not make sense for me. And that was the only time which was given to the participants to talk in front of the audience. Of course I had or could do some discussions during a break or free time, in which I did but why I couldn't or didn't have more time to speak or present something like you did? I think I should had it. Yes, like I said it would be much more interesting if the participants could have the same amount of time, or (formal) sessions like the facilitators/ resource persons had. It's very important I think, considering that the length of the forum which was too short. Don't you agree? I assume that someone like you, Peter or Shahidul whom have given talks or lectures very often in that kind of event/ occasions, sometimes just prefer to listen and see the (works) presentation of young photographers, than giving lectures for them.

Ahmed Polat (Netherland)

1) Since the beginning of my career I've been interested in how and if Art or in my case photography could influence the public opinion on cultural diversity. Because of my Dutch – Turkish background, I've focused my efforts on establishing a cultural dialog and find ways to bridge these 2 inherited cultures. When ASEF invited me to join the workshops in Malaysia I felt this was an opportunity for me to broaden my perspective and see how bigger organizations use photography to create a dialog between such different continents like Asia and Europe. During this exchange I've experienced a refreshing dialog with colleagues that I would normally never meet. And some of these relationships have evolved into a new collaboration.

2) Towards the start of this forum I've started working on documenting Artist spaces and Studios in Cities like Amsterdam, Rotterdam and The Hague. Because of a growing political awareness of the transformational force of artist, designers, musicians and other creative practitioners, local governments are financially supporting those artists that live and work in gentrified areas, abandoned office buildings and industrial sites. Hoping the side effect will be, that after several years, these same places will have been rebooted to life. During the forum I came to the conclusion that the



political context upon which I created this concept, differs a lot from my Asian colleagues and this created an interested dialog.

3) I believe that an organization like ASEF has the opportunity to find those individual artists that already have an interest in intercultural dialog, but may not be in the position to find other likeminded colleagues to establish international collaborations with.

4) At the moment we are working with 4 photographers from Asia and Europe that were selected after the forum to create a more indebt research on creative economies, with financial support from ASEF. I personally hope that the outcome of this project will strengthen the relationship between these creative's and that the quality of this new work is of a high enough standard that it will find its way to the public, through exhibitions, publication or other platforms.

5) I hope they keep an open mind, listen carefully to the artist they chose to work with and utilize this knowledge to create a flexible but determined structure in which they can support more artist in the future.

Alex Wong (Malaysia) ⁷⁾

1) Contact and communication with artist, curator and guest speaker from both Asia and Europe helps me to see, realize and share versatile topic about current photography. As well as talking and sharing works with emerging photographers.

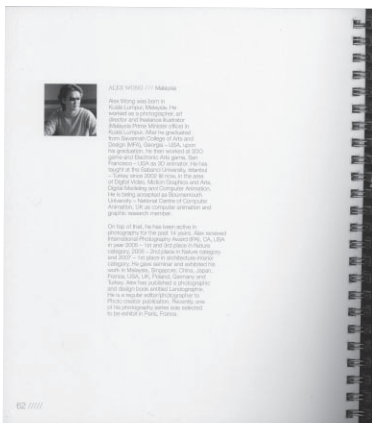
2) Attached in series 1 and series 2, as my interpretation of creative economy.

3) Animation, Film, Video and photography festival (“Media Art” cultural exchange events). A theme about “global warming” or “world health” could be the main theme for coming year of cultural exchange.

4) Guest speaker presentation on various topics in photography and contemporary art event. As well as transportation and flight ticket support to be involve in this wonderful cultural exchange event. I think a workshop to produce practical work with guest speaker is much better than just talking and hearing from them. If both “Presentation-critique” and “practical” session could be organized, it would enrich the program and perhaps getting much better results.

5) Better and more ASEF assistants helping out in such short and compact event.

あわせて、フォーラム終了後ASEFに提出したレポート論文を、以下原文のまま転載する。



Dive into the “Creative World”

Hiromi Nakamura

Curator

Tokyo Metropolitan Museum of Photography

Let me first address the question, “Why *Creative Economies* now?”

As you know, we are now confronting a “once a hundred years” economic crisis touched off in 2008 by the financial crisis in the USA. This crisis led me to reconsider the meaning of “economy.” Economic diplomacy, economic principles, economic structure/infrastructure, economic friction, economic aid Naturally enough, all economic activities are closely linked in our globalized world. I suggest, then, that we change “economy” to “world,” and re-phrase our question as, “Why *Creative World* now?”

The Forum began with the blog interaction in connection with the following lectures and various workshops at National Art Gallery Malaysia and Annexe Gallery from May 10th to 18th. Blogging is now the most popular way to communicate on a global scale; there can be no doubt about that. We were all, I believe, disappointed with the result, however, for two reasons: 1) Difference in understanding the theme, 2) Time lag between the participants. Once I believed that the blog would be as important as one of the *three Sacred Treasures* (symbolizing the Japanese Imperial throne): the mirror, the sword, and the crescent jewel. Now, however, I see that my expectations were too high. I am also happy, however, to note the gaps that have appeared in and around the blog. The discovery of these differences is a very important result for an international forum. We need to recognize our differences first and find a better way to facilitate our next steps. Changing the blog is, however, a major undertaking, and the costs and risks are significant.

Whatever we decide about the blog, Forum participants agreed that the *Creative Economies* is an important global theme. I recall the most impressive moment for me in Nathalie BeLayche’s presentation, as one of the facilitators. One artist’s work left us silent and won the applause of the whole audience with no explanation at all. The only thing that bothered me was the music, which seemed too much like propaganda. Nonetheless, the artist had gone and straight to the heart of the matter, and that won us over. This is exactly what I have been looking for, a power inherent in photography, and the *Creative World*. Through the Forum, I learned that to belong to the *Creative World* is to *Meet the World*.

How did we meet and face the world? The first encounter was self-introductions/ presentations by the artists who showed us their images at the start of the forum. They showed us the worlds to which they belong, and, of course, they were all different. Still, however, we could find common ground in the curiosity that led to the creation of these images. Later, I had a chance to participate in Portfolio Reviews with 11 participants. I am sorry that I didn't get to meet them all, but I really enjoyed talking with those I did me about their backgrounds, concerns, plans and hopes for their future. I always urge artists, especially young artists, to share their work openly and listen to what strangers say about it. Strangers, not family members, not friends, not acquaintances, are honest and have sharp tongues. They are not flatterers. That's why what they say can be so useful in defining future goals and directions. Finally, we, the curators and artists, met and faced our audience, strangers from the world at large at the exhibition at the Annexe Gallery in Malaysia. Then, our story continued in Tokyo, Japan. On July, Amit Madheshiya, one of the participants, joined the *Cultural Typhoon* at the Tokyo University of Foreign Studies and presented his tent cinemas project there. This mixed media work combines projection of his photographs with local sound effects by his local collaborator, Shirley. Comparing these two presentations on a single theme, one the classic single-medium presentation of photography and the other a multimedia photographic installation, awakened me to new possibilities for presenting photography to promote deeper understanding by the audience. There is much more at stake here than the old fight between film-based and digital photography.

The last question is, "Why Photography now?"

Since the twentieth century, science and technology have developed at ever accelerating speeds, transforming our perceptions of the world and even of space. Now, in the twenty-first century, we endlessly demand more progress, but we know sometimes progress renews interest in both ends of the pendulum, the old as well as the new.

As computer-generated music peaks, unplugged music becomes more popular.

As ultra-modern mega disco peaks, people begin to turn to intimate clubs instead.

As minimalism reaches its apogee, the decorative gothic/lolita mode suddenly reemerges.

Where the eye is used to floods of color, the light and shadows of monochrome are refreshing.

Past and present, photography continues to me the powerful media link between the self and the other, the self and the world.

このたび、本フォーラムにご招聘いただいたASEFおよび国際交流基金をはじめ、本論のためにコメントを寄せていただいたMr. Agung Nugroho Widhi、Mr. Ahmed Polat、Mr. Alex Wong、また快く会場記録写真や講演資料写真を提供していただいた伏見行介氏、マグナム・フォト東京支社、そして最後に、ご支援、ご協力いただいた関係各位に心から感謝の意を表したい。

註：

- 1) <http://www.asef.org>
- 2) Peter Bialobrzeski (Germany, photographer), Shahidul Alam (Bangladesh, photographer, director of Chobi Mela: the festival photography in Asia), Alex Moh (Malaysia, photographer, coordinator), Nathalie Belayche (France, independent curator), Yee-I-Laan (Malaysia, artist), Martin Fuchs (Austria, Magnum Photo editor), 西宮正明 (日本広告写真家協会元会長)、中村浩美 (東京都写真美術館学芸員)
- 3) <http://www.artgallery.org.my/article/1/national-art-gallery-malaysia>
- 4) *The Concept*, ASIA-EUROPE Emerging Photographers' Forum 2009 KUALA LUMPUR, ASEF
- 5) 当館で開催された『マグナムが撮った東京』展 (2007年) のための論文 “TOKYO X MAGNUM = ∞” に加筆したもの
- 6) 巻頭、図2点 (p.11) 参照
Arif Wicaksono from *The Workers* series, 2009 (above)
Untitled #11 from *Artificially Natural*, 2009 (below)
© Agung Nugroho Widhi
- 7) 巻頭、図2点 (p.12) 参照
From the series of *The Jokers are everywhere*, 2009
© Alex Wong